第五十九回
令和六年度

関西俳句大会句集

主催　公益社団法人　俳人協会

後援　朝日新聞社

第五十九回
令和六年度

関西俳句大会

朝日新聞社・関西俳句大会賞

末座とはいへど月には遠からず　京都府　藤堂くにを

関西俳句大会賞

しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　奈良県　貞許泰治

船底の畳のにほふ帰省かな　大阪府　今井文雄

ゐのこづち取つてゐる間に次の駅　広島県　石橋康徳

噴水のまた一からを始めけり　広島県　同

褌を足すアイヌの星の物語　兵庫県　堀　瞳子

今頃は数学の筈大試験　愛知県　中島　葵

地震の地の割れし畑より大根抜く　愛知県　中川キヌヨ

最大の円を描きて独楽止まる　三重県　伊藤孝子

大鷹を伊吹の空に見失ふ　奈良県　松原綾乃

入選句集

—到着順—　太字の作品は特選

南うみを選

船底の畳のにほふ帰省かな　今井文雄
無駄足の一歩もなかり弓始　杉本征之進
子目高に沈む力の生まれけり　貞許泰治
こんな字も忘れてをりぬ木の葉髪　野口喜久子
連山を望み山廬の松手入　尾崎恵美子
夏足袋の指に力の漲れり　譲尾三枝子
百歳に伸び代ありと初みくじ　森田千重子
著ぶくれることに始まる余生かな　松下孝裕
震度五強刃を入れしまま冬りんご　小坂優美子
抜け径のことに混み合ふ宵ゑびす　大谷昌子
うららかや唄ふが如き母の愚痴　荒木信夫
雪吊りの緊張松に及びけり　長谷川紀美子
とんぼうの恋の翅音のそろひをり　貞許泰治
北窓を塞ぐ簞笥の位置変へて　神藤寛子
鬼百合の蕊むき出しに反り返る　井上惠美子
飾売テントの奥に松寝かせ　楢崎美和子
子は化石われは蕨を探しをり　師岡洋子
もう一度夜干の梅の空仰ぐ　八嶋昭男
大釜を沸らせ若布刈舟を待つ　古賀勇理央
河豚食うて存外小さき壇ノ浦　谷田明日香
初夏の風の中より吾子生る　西岡たか代

柴田多鶴子選

寝て食べて今は寝てゐる帰省の子　小島元博
替へ足袋のそれも汚して寒稽古　池田雪彦
末座とはいへど月には遠からず　藤堂くにを
息づける寒鯉くるむ新聞紙　渡辺美智代
山毛欅の木に熊の爪痕薬喰　本土彰
この川に鮎戻り来と壁新聞　山田東海子
罠掛けて来しとふ手より栗貰ふ　近藤昶子
商品の雛に敬語の老店主　堀上慶子
遠泳を了へし一歩の地の重し　谷口一好
鷽替ふるフォークダンスをするやうに　岩崎可代子
鉾動き四条界隈沸騰す　大谷昌子
飛ぶことを忘れたやうに浮寝鳥　春名勲
観潮船そこまで渦に寄らずとも　七種萩子
御慶のぶ能登の震災憂ひあひ　延永和枝
初鍛冶の桶に榊を浸しをり　阪本道子
古里の変はらぬ家並日野菜干す　酒井多加子
ゐのこづち取つてゐる間に次の駅　石橋康徳
母いつも誰か待つかに炬燵の間　荒田眞智子

石井いさお選

聞いてゐぬ事まで話し遠足児　堀上慶子
煤で書く俘虜の葉書や冬ざるる　岡田有旦

ひざの子のぬくみとゆるる半仙戯　**森下まゆみ**
ゐのこづち取つてゐる間に次の駅　石橋康徳
水澄むや崖に国栖奏伝習所　原英俊
罠掛けて来しとふ手より栗貰ふ　近藤昶子
若水を馬へ馬術部女子大生　尾崎恵美子
秋灯下なぞりてみたる生命線　野坂潭
毛糸編む時間の束を積み重ね　田島もり
付添ひの我も一心弓始　池田和子
初刷の朝刊夫に供へけり　藤田駒代
移民船の航きしは昔鳥雲に　蘭定かず子
観潮船そこまで渦に寄らずとも　七種萩子
龍を彫る鑿二百本冴返る　日野久子
緩やかに上がる跳ね橋風光る　浅川加代子
冬ざるる溝に割れたるヘルメット　松村晋
初鍛冶の桶に榊を浸しをり　阪本道子

しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　**片山由美子　選**
大鷹を伊吹の空に見失ふ　**貞許泰治**
ひんやりとシーツの乾き花八手　**松原彩乃**
浮寝鴨人の気配に向きかふる　**衣川洋子**
家持の歌の海照り若菜摘む　渡辺美智代
向き向きに草を食む牛大夕焼　光田道子
一斉に新車積み込み初荷船　堀上慶子
アイゼンに土の弾力雪間草　中村文子
豊年や旧家に残る煙出し　藤岡滿
昼顔や基地のフェンスに絡み咲く　松本美佐子
人の世に国境のあり大地凍つ　田中まさ惠
子は化石われは蕨を探しをり　伊福悠紀
師岡洋子

囀や鳥にも好きな木のありて　矢野洋子
鳥渡る城より高きビルの増え　浅田をさむ
波音のすぐそこにある松手入　安田徳子
蒲公英の黄に囲まるるベビーカー　山本孝子
笑むことが母の返事や花ミモザ　宮谷ふさ子
少年の押す自転車の大根かな　大島幸男

地震の地の割れし畑より大根抜く　**手拝裕任　選**
鷺替ふるフォークダンスをするやうに　**中川キヌヨ**
今頃は数学の筈大試験　**岩崎可代子**
ひんやりとシーツの乾き花八手　**中島葵**
寝て食べて今は寝てゐる帰省の子　衣川洋子
ぶらんこにヤングケアラー漕ぐでもなく　小島元博
草の実の裾を払へば袖に付く　江藤隆刀庵
葉書とふ心の翼風薫る　相良研二
入口は裏にあります闇汁会　樋口昇る
福笑仕あげし顔を子が真似て　古野由美子
震度五強刃を入れしまま冬りんご　桑原里美
一人づつ去りてひとりの十三夜　小坂優美子
発掘の第五次六次大枯野　岡田邦男
蜜柑狩あの木この木と味見して　高橋翠
笑むことが母の返事や花ミモザ　三上孝子
観潮船そこまで渦に寄らずとも　宮谷ふさ子
帰路もこの道にしませう冬菫　七種萩子
城跡の石一万個秋高し　井上惠美子
手加減の玉にはじまる雪合戦　稲田いづみ
分校の生徒に出会ふ探梅行　田中美幸
初芝居帰りの髪に紙の雪　山内節子
安里道子

二月まだ風に嘴水に棘　岡崎秋胡子
線香の火種の逃ぐる寒さかな　角野京子

江崎紀和子選

雪に寝て雪より白し寒立馬　富田範保
噴水のまた一からを始めけり　石橋康徳
末座とはいへど月には遠からず　藤堂くに男
なまはげの面取り人に戻りけり　塚本治彦
鏡開母の手力ことのほか　西浦昭美
直球の枯野へ逸れてゆきにけり　杉口麗泉
螺子少し弛めて生きむ酔芙蓉　東里季
褶を足すアイヌの星の物語　堀瞳子
手秤のどれも重たき寒卵　里見かつこ
いつしかに大物顔や竈猫　蔵澄絹枝
引き抜きて大根の穴笑ひけり　柄川由紀子
雪霏霏と救助の背にも瓦礫にも　下村裕子
うららかや唄ふが如き母の愚痴　荒木信夫
みどりごへ冷ますひと匙薺粥　衣川洋子
満目の青田を風と帰りけり　西尾敬一
枝宮の一つ一つも初参　蔵本芙美子
晴れ晴れとたふれてをりぬ秋桜　乾祐子
ならやひの松明鬼を煽りけり　籾田あやの
連山を望み山廬の松手入　尾崎恵美子
反骨は胸奥にあり日なたぼこ　池田緑人
早稲を刈る大和照つたり曇つたり　光田道子

谷口智行選

かくれんぼ布団の中にひとりゐる　川合悦子
十二月八日に届く回覧板　岡田邦男
いつせいに熊野古道の柿熟るる　磯勢子
船底の畳のにほふ帰省かな　今井文雄
この川に鮎戻り来と壁新聞　山田東海子
墓洗ふ兄弟の役自づから　中村紘
噴水のまた一からを始めけり　石橋康徳
月探す子の目の高さまで屈み　小寺篤子
寒柝の静けさばかり残りけり　辻本漂汀
末座とはいへど月には遠からず　藤堂くにを
しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許泰治
海山の果に星出づ掃納　伊藤秀雄
初夢のさはりを言ふにとどめたり　一條文子
水没の坑道抱き山眠る　猪瀬和男
口上は父を越えたり農具市　時政かね代
祝詞から佳き名こぼれて七五三　宮谷ふさ子
じよんがらのたけなは陸奥の雪たけなは　七種萩子
老犬の一歩を待てる春日かな　貞許泰治
卒業式全住民に御案内　浦貴子
凧ひとつ揚がる遺跡の丘晴れて　松井洋子
子は化石われは蕨を探しをり　師岡洋子
もう一度夜干の梅の空仰ぐ　八嶋昭男
そつくりの子に生れ来てひひな抱く　西田洋

古賀雪江選

避難所に膝かかへつつ鰤起し　佐藤舟若
荒梅雨に包まれて家小さくなる　福井貞子
夜勤てふ介護士勤労感謝の日　西浦昭美
天高し俳聖殿は旅姿　森田久枝
開戦日十九の父を子に語り　岩下美鈴

日の丸を揚げて渡船の初仕事　江川伸子
山焼の点から線へ駆け昇る　松本愛子
鵠守る田は手を付けず春耕す　吉浦増
猛き火を挟み撃ちして畦を焼く　松本愛子
雪霏霏と救助の背にも瓦礫にも　下村裕子
本土へは十歩の橋よ鰯雲　森本弘子
抜け径のことに混み合ふ宵ゑびす　大谷昌子
山廬の威そなへり色を変へぬ松　尾崎恵美子
蘆牙や底力とはこんなもの　藤本厚子
柿吊す窓半分の空残し　矢野紘子
投函へ道一本の雪を掻く　宮崎きくを
歩の合はぬ城の石段鵙高音　米野てるみ
柿すだれ潜りて入る山の宿　富田洋子
芋の露揺らぎゆらぎてなほ落ちず　古賀勇理央
寒柝の静けさばかり残りけり　辻本漂汀

朝妻　力選

雪見舞ショベルと命綱担ぎ　山内節子
鳳輦の過ぎたる真闇蚯蚓鳴く　大山文子
工房のかの塗師いかに寒の地震　田中珠生
電車より電車を指す児あたたかし　近藤伸子
行く年や捨て窯となる窯に酒　池田華甲
水澄むや崖に国栖奏伝習所　原英俊
冴ゆる夜の振子時計の音確か　蓮井いく子
道行の舞台にも以て花吹雪　藤堂くにを
末座とはいへど月には遠からず　同
床の間に余震の埃寒に入る　前九疑
下校児に手を休めたる雪下し　大島幸男
手を握るだけの看取りや夜の秋　古賀勇理央

うららかや唄ふが如き母の愚痴　荒木信夫
宍道湖の夕日そびらに浮寝鳥　長谷川紀美子
祝詞から佳き名こぼれて七五三　宮谷ふさ子
御慶のぶ能登の震災憂ひあひ　延永和枝
山籟のをさまらぬ夜の濁り酒　小都妙子
百選の夕日に染まる水仙花　小林真千子
春の雪紙鍵盤に弾む指　真尾公子
月探す子の目の高さまで屈み　小寺篤子
寝返りのできて笑む子や春障子　阪井京子
笑むことが母の返事や花ミモザ　宮谷ふさ子

西村和子選

じよんがらのたけなは陸奥の雪たけなは　七種萩子
本線を逸れゆく尾灯秋の暮　細野恵久
寒稽古くつきり古稀の力こぶ　有村真由美
頼りきし夫に頼られ梅日和　小林和子
振り向けばまだ手を振れる秋の暮　若林絹代
白足袋をはき余所ゆきの顔となる　亀山みか月
船底の畳のにほふ帰省かな　今井文雄
捨て難き手擦れの一書啄木忌　光田道子
尼さまの佳き声とどく実千両　松原綾乃
なまはげの今にも火焔噴きさうな　倉田信司
底冷えの御堂に響く朝事かな　泉田欽司
しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許泰治
日の丸を揚げて渡船の初仕事　江川伸子
しののめのしろがね明かり寒紅梅　西宮舞
蜜柑むく昭和の歌を聴きながら　上西美枝子
夕星を露はに落葉尽くしけり　久松雅彦
うららかや唄ふが如き母の愚痴　荒木信夫

予備校へ行くといへども初電車　山内茉莉
啓蟄や埴輪の顔に穴三つ　木村由希子
古着屋の大きな鏡春を待つ　光田道子
初芝居帰りの髪に紙の雪　安里道子

浅井陽子選

青空を泳ぐかたちに柳葉魚干す　前田拓
水澄みて郡上八幡下駄の音　深井保男
霜柱踏み月光を砕きけり　野口喜久子
地を蹴つて万緑をゆくリフトかな　室達朗
白菜の渦大皿にほぐしけり　堀瞳子
百歳に伸び代ありと初みくじ　森田千重子
埴輪の眼涼しき風の通りけり　杉本征之進
気づかざるものにしあはせ薺粥　松本英夫
切取りし乳房の行方冬の靄　平井芙美子
笑むことが母の返事や花ミモザ　宮谷ふさ子
じよんがらのたけなは陸奥の雪たけなは　七種萩子
子目高に沈む力の生まれけり　貞許泰治
トーストの焦げ目の濃くて蝉時雨　朝田敏子
慈善鍋人の温もり滾らせて　井上惠美子
灯を揺らし金魚影ごと掬はるる　松井洋子
ふらここを揺らして風のうらおもて　市川浩美
一枚の剃刀となり蝶凍つる　小林恕水
ライバルは百三歳や日向ぼこ　池田廣子

宮谷昌代選

榾を足すアイヌの星の物語　堀瞳子
今頃は数学の筈大試験　中島葵
月探す子の目の高さまで屈み　小寺篤子
三姉妹の生き方薔薇の育て方　宮﨑清美
牛の脚抱へ爪削ぐ頬被り　小津溢瓶
父が子にバトンを渡す秋祭　小西尚美
屠蘇を酌む父の塗りたる蒔絵椀　福本せつこ
どうにでもしてくれと冬瓜ごろり　板倉眞知子
皺が寄るほどに旨さの干大根　芦田芳久
卒寿越ゆ母は健脚遍路なる　川上純一
役に立たうと立つまいと案山子立つ　坂元軒二
一族を集めひとりの入学式　松下孝裕
障子貼る妻の指図を背ナに受け　須賀遊子
屈まりてあどけなき子と鷽替ふる　阿部由希子
夏痩せていよよ仙人くさくなる　三宅崇代
一人づつ去りてひとりの十三夜　岡田邦男
漁継がぬ海を称へる卒業歌　三ツ矢龍美
子目高に沈む力の生まれけり　貞許泰治
小枝の手つないでゐたる雪だるま　香山直子
子は化石われは蕨を探しをり　師岡洋子
三歳のままの弟魂迎　岩崎可代子
幸せの家族の形小菊咲く　滝本香世

名村早智子選

柿吊す窓半分の空残し　矢野紘子
晴れ晴れとたふれてをりぬ秋桜　乾祐子
祝詞から佳き名こぼれて七五三　宮谷ふさ子
枯蜉蝣生きんがための高さ跳ぶ　小寺篤子
一命を朝まで包む毛布かな　野口喜久子
存らへて俳句ありけり木守柿　上野鮎太
母校より始業のチャイム大根蒔く　古川邑秋

代掻きて水の匂ひの濃くなりぬ　譲尾　三枝子
松手入れ通り掛りが指図して　蓮井　いく子
巣つばめや駅の一日始まりぬ　貞許　泰治
聞いてゐぬ事まで話し遠足児　堀上　慶子
福笑仕あげし顔を子が真似て　桑原　里美
ふる里は雪ラーメンの旨き町　相馬　行行子
替へ足袋のそれも汚して寒稽古　池田　雪彦
涸れ知らぬ流れに委ね紙を漉く　山尾　カツヨ
己には落さぬやうに栗落す　前田　拓
そこだけが昭和のままや夜店立つ　池田　純子
来年まで持ち越しさうな日焼かな　同
奥能登の山のもてなし蕪鮨　猪瀬　和男
見た目には柔らかさうな冬木の芽　井上　惠美子
かくれんぼ布団の中にひとりゐる　川合　悦子
大釜を沸らせ若布刈舟を待つ　古賀　勇理央
きつと来る戦なき世や初明り　栗原　勝風

桑島啓司選

忸怩たるさまにも見えず破れ蓮　野口　城
蘆牙や底力とはこんなもの　藤本　厚子
役に立たうと立つまいと案山子立つ　坂元　軒二
焚火して老人会の打ち合せ　小松　丈夫
白足袋をはき余所ゆきの顔となる　亀山　みか月
ごろすけほうあの方はもうゐずなりぬ　池田　緑人
思ひ出に後悔多し虎落笛　猪田　初美
母校より始業のチャイム大根蒔く　古川　邑秋
捨て難き手擦れの一書啄木忌　光田　道子
屠蘇を酌む父の塗りたる蒔絵椀　福本　せつこ
酪農を捨てて玉葱干す牛舎　藤堂　くにを

稲架を組む祖父の大きな力瘤　桑原　里美
頑に守る父祖の地耕しぬ　越智　巌
老いてなほただよふ艶や謡初　大星　たかし
吾よりも吾を知る妻根深汁　小野　薫
読初のなぞる指先点字本　西原　薫
奉納の藁の大蛇や豊の秋　長谷川　紀美子
校正に倦みベランダへ月今宵　徳永　真弓
払ひても離れぬ力ゐのこづち　西尾　伊世子
母の忌の墓を離れぬ赤とんぼ　中村　未有

才野洋選

一族を集めひとりの入学式　松下　孝裕
手から手に湯気渡りゆく大根焚　六車　佳奈
鯛焼に口あり何か言ひたさう　渡里　トモ枝
なまはげの面取り人に戻りけり　塚本　治彦
月探す子の目の高さまで屈み　小寺　篤子
茶の花の籬伝ひに躑躅　柳生　清秀
弓なりの湾岸道路初日さす　田島　もり
星流る地に産声のあがるとき　道本　朗子
ポン菓子の大音響に冬日揺る　富田　範保
冬ぬくし畳の部屋の写真展　太田　健嗣
金婚の卓に零れて黒葡萄　藤田　駒代
くわりん落つ地面拳で打つごとく　藤田　啓子
口上は父を越えたり農具市　時政　かね代
みどりごへ冷ますひと匙薺粥　衣川　洋子
遠き日のやうに母との日向ぼこ　山本　輝代
あらたまの風を呼び込む大漁旗　川合　悦子
地球儀の南極に差す冬日かな　水間　千鶴子
草の実の裾を払へば袖に付く　相良　研二

秋時雨一つ灯して二人住み　江戸としえ
鷺替ふるフォークダンスをするやうに　岩崎可代子

田島和生選

偕老の夫よりもらふお年玉　服部登紀子
花冷や捨つるに惜しき母の服　松井春雄
甲板に離任の教師鰆東風　小都妙子
落武者の如きランナー寒の雨　中島走吟
一枚の剃刀となり蝶凍つる　小林恕水
引揚の波止に沖見る百合鷗　富田範保
窯入れのたぬき居並ぶ野菊晴　平尾美智男
象の鼻飼葉を散らす小春かな　友田芙美
捨て難き手擦れの一書啄木忌　光田道子
百歳に伸び代ありと初みくじ　森田千重子
アイゼンに土の弾力雪間草　藤岡滿
数へ日の僧ひとり座す理髪店　畑尚美
床の間に余震の埃寒に入る　前九疑
流木は海驢に似たり浜焚火　樋口精一
山籟のをさまらぬ夜の濁り酒　小都妙子
初鍛冶の桶に榊を浸しをり　阪本道子
歩きかた忘れさうなり冬籠　種村真小児
波音のすぐそこにある松手入　安田徳子
薬みな日付を記し冬籠　荻野隆子
葛湯吹く文一通を書きあぐね　緑川啓子
屠蘇を酌む父の塗りたる蒔絵椀　福本せつこ
耳打ちの息こそばゆき日向ぼこ　譲尾三枝子
初刷の朝刊夫に供へけり　藤田駒代

野中亮介選

餅搗の一臼に日の昇りけり　古川よし秋
大鷹を伊吹の空に見失ふ　松原綾乃
海女小屋を縛り上げたる野分かな　西尾敬一
尖りたる男の裸体初稽古　牧田満知子
ふらここや空を分け合ふ姉妹　能勢ゆり
三姉妹の生き方薔薇の育て方　宮﨑清美
嶺風や樏を売る金物屋　山本孝子
母いつも誰か待つかに炬燵の間　荒田眞智子
再会を楽しむやうに帰り花　猪田初美
虫すだく古墳の形に闇生まれ　古川邑秋
屠蘇を酌む父の塗りたる蒔絵椀　福本せつこ
尼さまの佳き声とどく実千両　松原綾乃
菖蒲湯の五右衛門風呂を頂きぬ　藤堂くにを
岩海苔に交じる家郷の真砂かな　香椎みつゑ
煮凝や庇をよぎる星の数　山内節子
十二月八日に届く回覧板　岡田邦男
切取りし乳房の行方冬の靄　平井芙美子
じよんがらのたけなは陸奥の雪たけなは　七種萩子
啓蟄や埴輪の顔に穴三つ　木村由希子
初芝居帰りの髪に紙の雪　安里道子
徴兵のなき国にゐて冷奴　岡田邦男
吊り橋の真中に佇てば雁渡し　仲上順子

村上鞆彦選

しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許泰治
しののめの梅が香谷をながれけり　水間千鶴子
ゐのこづち取つてゐる間に次の駅　石橋康徳
荒梅雨に包まれて家小さくなる　福井貞子

慈姑剥く夫しづかなり慈姑剥く　吉元美枝子
摘み痕のまだ新しき蕨かな　石橋康徳
牛黒く馬赤くして初御空　春名あけみ
船底の畳のにほふ帰省かな　今井文雄
山毛欅の木に熊の爪痕薬喰　本土彰
作業着の冷たさばつと纏ひけり　宮崎こうや
箸使ひきれいな夫と鮎を喰ぶ　滝本香世
繭玉の肩にふれたる別れかな　谷中弘子
蛤になれぬ雀と畑仕事　山本はじむ
初刷の朝刊夫に供へけり　藤田駒代
切取りし乳房の行方冬の靄　平井芙美子
ひんやりとシーツの乾き花八手　衣川洋子
独り居の寒の雑巾しぼりけり　長山敦彦
初夏の風の中より吾子生る　西岡たか代
数へ日の雨を見詰むる厨かな　横田恵
漁火に傾れて銀河いよよ濃し　小澤巌
集落の顔の寄り合ふ蛍の夜　松村晋

山尾玉藻選

しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許泰治
床の間に余震の埃寒に入る　前九疑
抜け径のことに混み合ふ宵ゑびす　大谷昌子
手加減の玉にはじまる雪合戦　田中美幸
春の山ながーいすべり台垂らし　亀山みか月
薔薇買つて帰れば何か言はれさう　藤堂くにを
秋時雨一つ灯して二人住み　江戸としえ
替へ足袋のそれも汚して寒稽古　池田雪彦
屈まりてあどけなき子と鵙替ふる　阿部由希子
手から手に湯気渡りゆく大根焚　六車佳奈

かかへられ来し着ぶくれの大僧正　坂口夫佐子
子目高に沈む力の生まれけり　貞許泰治
裸木の雲を掃きをり流しをり　山路香苗
寒天の風より軽く干し上がる　平田冬か
日脚伸ぶ艇庫の壁の水明り　師岡洋子
門からの見映えを問うて剪定す　猪飼和代
小枝の手つないでゐたる雪だるま　香山直子
雪吊の堂堂の陣張りにけり　森田久枝
百選の夕日に染まる水仙花　小林真千子
巌となり壁となりては冬怒濤　渡辺倫子
鍬洗ひし水で火を消す秋仕舞　福井英敏
啓蟄や埴輪の顔に穴三つ　木村由希子
子らの輪を歪めとんどの火の猛る　平田はつみ

伊藤瓔子選

窯入れのたぬき居並ぶ野菊晴　平尾美智男
神神の去にて出雲の山眠る　小澤巌
黒潮に囲まれ島の梅早し　渡辺美智代
連山を望み山廬の松手入　尾崎恵美子
落葉掃く銀行員の背広にて　岡田有旦
家持の歌の海照り若菜摘む　光田道子
替へ足袋のそれも汚して寒稽古　池田雪彦
涅槃図に絵師等伯も描かれゐて　春名勲
柿焼けば子規の知らざる甘さあり　一條文子
大仏の膝下に寒の募金箱　角野京子
べた凪や折紙めきぬ海鼠舟　谷口ちほ
会釈して月のベンチに隣り合ふ　荒木信夫
宍道湖の夕日そびらに浮寝鳥　長谷川紀美子
翼あるものも歩けり大干潟　西尾敬一

啓蟄や埴輪の顔に穴三つ　木村由希子
古書を売り裏路地帰る一葉忌　松村晋
天平の塔を遥かに早稲を刈る　光田道子
耳打ちの息こそばゆき日向ぼこ　譲尾三枝子
英訳はスマホにゆだね漱石忌　下村裕子

田中春生選

最大の円を描きて独楽止まる　伊藤孝子
白鳥のぽとりと銀のひとしづく　倉田信司
薬莢を以て呼び戻す猟の犬　平田冬か
白息の待ちゐる移動販売車　石橋康徳
一枚の剃刀となり蝶凍つる　小林恕水
寒柝の静けさばかり残りけり　辻本漂汀
早稲を刈る大和照つたり曇つたり　光田道子
餅搗の一臼に日の昇りけり　古川よし秋
寝たふりの上手な子猫貰ひけり　舘野茂子
身支度は氷の鏡雪女郎　蓮井いく子
聞いてゐぬ事まで話し遠足児　堀上慶子
しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許泰治
役に立たうと立つまいと案山子立つ　坂元軒二
伊勢志摩の車内広告春まぢか　室谷早霞
寒の鯉水が重しと沈みをり　西尾敬一
焚き添へてシテの出を待つ薪能　藤堂くにを
寝返りのできて笑む子や春障子　阪井京子
頃合ひと笑みのこぼるる温め酒　左近静子

和田華凜選

葉桜や窯出しの日の空青く　渡辺美晴
百選の夕日に染まる水仙花　小林真千子
牛黒く馬赤くして初御空　春名あけみ
寝たふりの上手な子猫貰ひけり　舘野茂子
一命を朝まで包む毛布かな　野口喜久子
ぶらんこにヤングケアラー漕ぐでもなく　江藤隆刀庵
雪虫は雪降る予兆タイヤ換へ　佐々木紫水
ペンパルに書くやあれこれ蛍の夜　樋口昇る
花魁に肩貸す冥利秋まつり　富田範保
輪飾のそれぞれ揺るる船溜り　渡辺美智代
息づける寒鯉くるむ新聞紙　同
おん祭舞処も観るも芝の上　佐藤三千子
柚子風呂に愛宕越え来し靴並ぶ　谷添睦子
翼あるものも歩けり大干潟　西尾敬一
鬼百合の蕊むき出しに反り返る　井上惠美子
梅雨満月地上は水の匂ひ充ち　松井洋子
地球儀の南極に差す冬日かな　水間千鶴子
飛ぶやうにきたる少女やしやぼん玉　植田桂子
小枝の手つないでゐたる雪だるま　香山直子
陽炎へる地図には載らぬ瀬戸の島　永田圭子
人日の針もて抜くや指の棘　松本美佐子
冬ぬくし畳の部屋の写真展　太田健嗣

井上弘美選

榾を足すアイヌの星の物語　堀瞳子
ぎす鳴くや鉱夫の彫りし磨崖仏　富田範保
翼あるものも歩けり大干潟　西尾敬一
水澄むや崖に国栖奏伝習所　原英俊
雪に寝て雪より白し寒立馬　富田範保
日脚伸ぶ艇庫の壁の水明り　師岡洋子

行く年や捨て窯となる窯に酒　池田華甲
池の鴨ばかり見てゐる七五三　松村正之
牛の脚抱へ爪削ぐ頬被り　小津溢瓶
一命を朝まで包む毛布かな　野口喜久子
船底の畳のにほふ帰省かな　今井文雄
魚止の滝の氷れる吉野かな　堀　瞳子
繭玉の肩にふれたる別れかな　谷中弘子
阪神忌備蓄の水の朝のティー　岡田満喜子
発掘の第五次六次大枯野　髙橋　翠
湯気纏ふ手の神がかり寒造　村上直子
子は化石われは蕨を探しをり　師岡洋子
篠笛の袋あつらへ春を待つ　棟方武城
初鍛冶の桶に榊を浸しをり　阪本道子
天心にふはりと白き朴の花　山﨑淑加
円光は吾をも照らす涅槃変　村手圭子
一枚の剃刀となり蝶凍つる　小林恕水

尾池和夫選

地虫鳴くこれより魔物たちの夜　國田欽也
帰路もこの道にしませう冬菫　井上惠美子
花道の名告は五歳村芝居　松村晋
噴水のまた一からを始めけり　石橋康徳
緑陰や孫に教はる地質学　夷子禮子
黒潮に囲まれ島の梅早し　渡辺美智代
湧き水の豊かな郷の芋水車　中川悦子
罠掛けて来しとふ手より栗貰ふ　近藤昶子
立ち止まる子らの歓声煙茸　政元京治
川底を覗く子等の眼日脚伸ぶ　下口啓子
祝詞から佳き名こぼれて七五三　宮谷ふさ子
独り居の寒の雑巾しぼりけり　長山敦彦
瀬戸内は曇りのち晴遍路笠　伊福悠紀
子は化石われは蕨を探しをり　師岡洋子
小枝の手つないでゐたる雪だるま　香山直子
大釜を沸らせ若布刈舟を待つ　古賀勇理央
ふらここを揺らして風のうらおもて　市川浩美
初芝居帰りの髪に紙の雪　安里道子
保育所の前に菜の花潮の音　渡辺倫子
霾るや玉門関のラクダの眼　三津木俊幸
この川に鮎戻り来と壁新聞　山田東海子
鳶の輪の大きかりけり春岬　谷口ちほ

小川軽舟選

ぶらんこにヤングケアラー漕ぐでもなく　江藤隆刀庵
しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許泰治
母校より始業のチャイム大根蒔く　古川邑秋
網代打ち流れに渦の生まれけり　山内繭彦
ひそやかにひぐらしの声林立す　福田千代子
校舎なき母校の門の帰り花　合志ヒロミ
古着屋の大きな鏡春を待つ　光田道子
巣つばめや駅の一日始まりぬ　貞許泰治
冬銀河タワーマンション灯の柱　古川武人
寒明けの風なほ荒く雲低く　新妻芙佐子
雨粒の光る楮や春近し　角野京子
松過の棚に大鍋納めけり　中家桂子
甲板に離任の教師鰆東風　小都妙子
春を待つ交番前のプランター　徳永真弓
みづうみの島の畑の朝ざくら　西田　洋
寒見舞大福さげて長子来る　松村貴美子

朽ち舟にあそぶ小魚水の秋　西本睦子
秋の声きく回廊の幾曲り　池田華甲
自転車の後ろ浴衣の女の子　岡村美江

三　村純也選

みづうみのこよなく晴るるいさざ舟　森山久代
ゐのこづち取つてゐる間に次の駅　石橋康徳
基地内の墓に畑に草萌ゆる　上西吾人
今頃は数学の筈大試験　中島葵
振り向けばまだ手を振れる秋の暮　若林絹代
草の実の裾を払へば袖に付く　相良研二
フラダンスショーの始まる夜のプール　小西尚美
眼を寄せて鑼を待ちゐる寒鮃　富田範保
耳打ちの息こそばゆき日向ぼこ　譲尾三枝子
スケートの靴言ふことをきかぬまま　小寺昌平
著ぶくれることに始まる余生かな　松下孝裕
風に乗るアザーンの声秋澄めり　山﨑隆代
屈まりてあどけなき子と鷽替ふる　阿部由希子
ご自由にどうぞと開く薔薇の門　貞許泰治
足の爪切つて勤労感謝の日　西尾敬一
かくれんぼ布団の中にひとりゐる　川合悦子
寺六つ城下の名残除夜の鐘　八嶋昭男
門からの見映えを問うて剪定す　猪飼和代
大釜を沸らせ若布刈舟を待つ　古賀勇理央
河豚食うて存外小さき壇ノ浦　谷田明日香
エープリルフールわたくしとしたことが　山中谷勝子
三味小さく太夫大きく近松忌　中川悦子
菰樽の名酒の文字の淑気かな　曽根新五郎

森田純一郎選

地震の地の割れし畑より大根抜く　中川キヌヨ
刀匠の槌音高く冬に入る　松原綾乃
虹立ちて災禍の空へつながりぬ　松本ゆきこ
寒柝の静けさばかり残りけり　辻本漂汀
混迷の世にこそ俳句翁の忌　吉浦増
笹子鳴く熊野古道の石畳　角雅行
あらためて独りと思ふおでん鍋　草野准子
水澄むや崖に国栖奏伝習所　原英俊
ニュース読むＡＩの声そぞろ寒　佐藤英子
帆かけ舟並べ近江の冬景色　松原綾乃
数へ日の僧ひとり座す理髪店　畑尚美
河豚鰭を干して客待つ縄暖簾　秦野淑恵
鷽替ふるフォークダンスをするやうに　岩崎可代子
寒紅をさして天神詣かな　山内繭彦
手を握るだけの看取りや夜の秋　古賀勇理央
大声で十日戎の銅鑼叩く　木森啓至
おん祭舞処も観るも芝の上　佐藤三千子
奉納の藁の大蛇や豊の秋　長谷川紀美子
池のぞむ緩和病棟小鳥くる　小坪美喜
観潮船そこまで渦に寄らずとも　七種萩子
幕の内弁当膝に二の替　宮川秀穂
水澄みて郡上八幡下駄の音　深井保男
手から手に湯気渡りゆく大根焚　六車佳奈

岩城久治選

正月や輪島で買ひし塗の盃　山本敏子
慈姑剥く夫しづかなり慈姑剥く　吉元美枝子
老医言ふ普通の風邪で良かつたぞ　倉田信司

かくれんぼ布団の中にひとりゐる　川合悦子
福笑仕あげし顔を子が真似て　桑原里美
酔ひ醒めの朝の茶柱二日かな　飯田敏康
くたびれし保険証あり春はゆく　舘　健一郎
底冷えのホームへ電車ドア開く　上田孝佳
ふる里は雪ラーメンの旨き町　相馬行行子
草野球どんぐり降らすホームラン　岩崎可代子
大寒の香炉を担ぐ三鬼かな　角野京子
慌て押す降りますボタンバスうらら　時政かね代
ひんやりとシーツの乾き花八手　衣川洋子
足の爪切つて勤労感謝の日　西尾敬一
受験子へいつもの卵焼き弁当　吉田あゆみ
帰路もこの道にしませう冬菫　井上惠美子
着ぶくれてオープンハウス過ぎゆけり　木村由美
スクラムに寒風入る隙間なし　和田桃
庖丁の握り手清め冷奴　谷美津子
河豚食うて存外小さき壇ノ浦　谷田明日香
古着屋の大きな鏡春を待つ　光田道子
末座とはいへど月には遠からず　藤堂くにを
罠掛けて来しとふ手より栗貰ふ　近藤昶子

徳田千鶴子選

春雨の音は墨絵の余白より　斎藤詳次
やつと喜寿たうたう喜寿よ梅ひらく　斎藤壽代
窯入れのたぬき居並ぶ野菊晴　平尾美智男
柿吊す窓半分の空残し　矢野紘子
気づかざるものにしあはせ薺粥　松本英夫
抜け径のことに混み合ふ宵ゑびす　大谷昌子
青空を泳ぐかたちに柳葉魚干す　前田拓

寒天の風より軽く干し上がる　平田冬か
初染や琴糸ほのと鬱金色　小谷廣子
芽やなぎやこつぽり鳴らし巽橋　宮川秀穂
白鳥の着水夕日急かしたる　大山文子
石蹴りの姉妹へ村の小春かな　白数宏子
起重機の伸び切る十二月八日　近藤伸子
初鍛冶の桶に榊を浸しをり　阪本道子
大綿を掴み掌何も無し　金津やよい
稲架を組む祖父の大きな力瘤　桑原里美
ポン菓子の大音響に冬日揺る　富田範保
払ひても離れぬ力ゐのこづち　西尾伊世子
野の小春笑ひ仏と泣き仏　富田範保

富吉浩選

寝返りの一瞬をさす寒さかな　池田雪彦
商品の雛に敬語の老店主　堀上慶子
船底の畳のにほふ帰省かな　今井文雄
初詣磴を数へる声と息　三宅美千子
白息の待ちゐる移動販売車　石橋康徳
道焚火人垣出来て相知らず　角雅行
凧揚げや凧に連れ去られてみたい　小林たみ子
水音のしたる方へと梅探る　常澤俶子
三歳のままの弟魂迎　岩崎可代子
暮易しバスは灯して客を待つ　藤田啓子
そこだけが昭和のままや夜店立つ　池田純子
手から手に湯気渡りゆく大根焚　六車佳奈
慌て押す降りますボタンバスうらら　時政かね代
諦めてをりし春月出てゐたり　田中久幸
エンドロールのごとき雪見るガラス窓　二井桜子

荒梅雨に包まれて家小さくなる　福井貞子
味見をへ去年となりたる厨かな　江濱百合子
小枝の手つないでゐたる雪だるま　香山直子
幸せのひとかたまりや毛糸玉　宇野晴美
鎮魂を手話で伝へる阪神忌　木村由美
詩人にも哲学者にもなる師走　横滝友子

大串章選

長老の座へ手を曳かれ新年会　古川よし秋
三姉妹の生き方薔薇の育て方　宮﨑清美
湧き水の豊かな郷の芋水車　中川悦子
母校より始業のチャイム大根蒔く　古川邑秋
雪晴の朝の金閣まのあたり　人見正
一軒家守り棚田守り注連綯ひぬ　倉田信司
針箱の持ち主変はり針供養　中西豊子
初刷の朝刊夫に供へけり　藤田駒代
そこだけが昭和のままや夜店立つ　池田純子
会釈して月のベンチに隣り合ふ　荒木信夫
眼帯を外したる日の草の花　貞許泰治
亡き父の書を軸にして冬座敷　中島正則
遠き日のやうに母との日向ぼこ　山本輝代
ミニスカートロングスカート青き踏む　清水寿恵子
山焼の点から線へ駆け昇る　松本愛子
波音のすぐそこにある松手入　安田徳子
探梅の海見霽かす墓地に出づ　杉本征之進
空に網打つて大漁鰯雲　新谷壯夫
一人寝の蒲団は重き花柄よ　上田圭子

最大の円を描きて独楽止まる　能村研三選
最澄の宇宙比叡の星月夜　伊藤孝子
鉋丁のはた俎の音の春　岩田宣清
噴水のまた一からを始めけり　倉田信司
迎鐘余韻静まるまで拝み　石橋康徳
山眠る生きとし生けるものを抱き　塚本治彦
寒柝の静けさばかり残りけり　渡辺美智代
ごろすけほうあの方はもうゐずなりぬ　辻本漂汀
二月まだ風に嘴水に棘　池田緑人
操舵輪握る月光もろともに　岡崎秋胡子
付添ひの我も一心弓始　大星たかし
初夢のさはりを言ふにとどめたり　池田和子
日輪のおぼろや与謝の細雪　一條文子
芋の露揺らぎゆらぎてなほ落ちず　大島幸男
吾よりも吾を知る妻根深汁　古賀勇理央
かまへんは承諾のこと春近し　小野薫
詩人にも哲学者にもなる師走　瀬崎こまち
工房のかの塗師いかに寒の地震　横滝友子
龍を彫る鑿二百本冴返る　田中珠生
日野久子

西池冬扇選

千枚漬終へれば風の鳴るばかり　岡島千秋
御降りやぽつくり寺の軒借りる　内田茂
どうにでもしてくれと冬瓜ごろり　板倉眞知子
寝たふりの上手な子猫貰ひけり　舘野茂子
耳遠き長老が守る焚火かな　延永和枝
振り向けばまだ手を振れる秋の暮　若林絹代
噴水のまた一からを始めけり　石橋康徳

牛の脚抱へ爪削ぐ頬被り　小津　溢瓶
のど飴のいつかなくなる春炬燵　和佐　佐代子
底冷えのホームへ電車ドア開く　上田　孝佳
この川に鮎戻り来と壁新聞　山田　東海子
代掻きて水の匂ひの濃くなりぬ　譲尾　三枝子
末座とはいへど月には遠からず　藤堂　くにを
褶を足すアイヌの星の物語　堀　瞳子
子を駅へ送りし後の鍬始　宇田　多香子
ポン菓子の大音響に冬日揺る　富田　範保
しばらくは宝恵駕はやす声の中　冨安　トシ子
少年の押す自転車の大根かな　大島　幸男
芋の露揺らぎゆらぎてなほ落ちず　古賀　勇理央
地虫鳴くこれより魔物たちの夜　國田　欽也
振り返りまた振り直す夏帽子　田中　俊
待春やおでん煮返し煮返して　深水　香津子
しばらくは行方見てをり雛送り　村上　光代

寒肥のよく効きさうな臭かな　塚本治彦
迎鐘余韻静まるまで拝み　同
なまはげの面取り人に戻りけり　同
返り咲く木瓜一輪に心寄せ　岩本芳子
山眠る二上山も金剛も　同
衛星も流星も飛ぶ包の宿　三津木俊幸
霾るや玉門関のラクダの眼　同
未来てふ希望ありけり新暦　上中光
花魁に肩貸す冥利秋まつり　富田範保
枯蝲蛄生きんがための高さ跳ぶ　小寺篤子
月探す子の目の高さまで屈み　同
野に生まれし風の素通り吾亦紅　同
耳塞ぎたくなるニュース聖樹の灯　安保美恵子
短日や旅荷を嗅げる麻薬犬　渡辺美智代
振袖に手を添へ歌留多かすめ取る　同
蝋梅や庭つづきなる子の住処　同
輪飾のそれぞれ揺るる船溜り　同
断層の跡をあらはに雪残る　同
糶られぬて槽にはりつく寒鮮　同
黒潮に囲まれ島の梅早し　同
柝の入り静まり返る初芝居　同
北斎の濤より高き冬怒濤　同
浮寝鴨人の気配に向きかふる　同
息づける寒鯉くるむ新聞紙　同
山眠る生きとし生けるものを抱き　同
池の鴨ばかり見てゐる七五三　松村正之
くたびれし保険証あり春はゆく　舘　健一郎
蒲公英の黄に囲まるるベビーカー　山本孝子
三姉妹の生き方薔薇の育て方　宮﨑清美
爪革の利休下駄履く初時雨　柳生清秀

茶の花の籬伝ひに躙口　柳生清秀
牛の脚抱へ爪削ぐ頬被り　小津溢瓶
白足袋をはき余所ゆきの顔となる　亀山みか月
春の山ながーいすべり台垂らし　同
ひよんの笛吹けば児の来る鳥の来る　富田範保
丈揃はぬままに開きぬ曼珠沙華　同
踊りつつ輪から抜け出る盆の僧　岩田芳雄
生れし村出で五十年椿の実　髙倉明子
風邪の夜の母の煎ずるどくだみ茶　同
畝立てて沃野千里の麦の芽よ　栗林白霜
おみくじの漢字読ませり七五三　麻生勝行
海胆採つて英語嫌ひの島の子ら　同
霜柱踏み月光を砕きけり　野口喜久子
一命を朝まで包む毛布かな　同
明日はまた明日の箒目落葉かな　同
こんな字も忘れてをりぬ木の葉髪　同
五つ玉弾く算盤文化の日　同
横文字の白き表札ライラック　下山春陽
越して来てすぐに打ち解け地蔵盆　松木元
寒柝の静けさばかり残りけり　辻本漂汀
恙なく生かされ生きて札納　瀬野浩
余生にはほど良き家居籐寝椅子　田島もり
弓なりの湾岸道路初日さす　和佐佐代子
のど飴のいつかなくなる春炬燵　木皮慧子
島裏は段々畑秋陽濃し　福田千代子
ひそやかにひぐらしの声林立す　本土彰
ポインセチアいつも浮かれたふりをして　同
木の葉髪むかし貰つた柘植の櫛　富田範保
稲実る遅速は色に千枚田　同
野の小春笑ひ仏と泣き仏　同

碧き眸の戦禍のがれし夜学生　古賀　勇理央
ぽつぺんに笑ひ止まざる二十歳かな　同
頬被り問ひかけらるをこばみけり　小松　丈夫
焚火して老人会の打ち合せ　同
冬の蜂伐りし櫻の洞に這ふ　齋藤　千代子
秋すだれ誰か来たかと風に問ふ　田村　英一
寒月を揺らし攻め焚く登り窯　富田　範保
木枯の梳く素麺の簾干し　同
葛城見ゆ青畝生家の初雀　永野　壽一
パチンコに子供も遊ぶ夜店かな　同
喰積のつめたき縁起いただきぬ　中村　未有
過去紡ぐ写真の不思議冬灯　南部　小花
鏡開母の手力ことのほか　西浦　昭美
夜勤てふ介護士勤労感謝の日　同
クリスマスサンタとエレベーターに会ふ　同
里山からお焦げの匂ひむかご飯　野田　ますみ
水澄むや崖に国栖奏伝習所　原　英俊
初みくじ英文もある東大寺　福本　須代子
レジの出しくれし割引券師走　三好　康夫
誕生の裸一貫天を抱く　室　達朗
爽やかや手話の平和を繋ぎゐて　同
地を蹴つて万緑をゆくリフトかな　同
監督の声援嗄るる極暑かな　同
耕人に風まだ尖る匂ひかな　同
大部屋は里恋ふる部屋後の月　山田　東海子
この川に鮎戻り来と壁新聞　同
春菊の雨音にさへ伸びてをり　同
走り根に躓いてなほ懐手　山本　一穂
象の鼻飼葉を散らす小春かな　友田　芙美
朝市を終へ対岸の初時雨　同

米櫃に米満杯や神の留守　友田　芙美
花種を蒔くにほどよき湿りかな　中間　一司
加はるも退くも自在や鴨の陣　利國　春美
校舎なき母校の門の帰り花　合志　ヒロミ
ふつくらと幸せさうな初雀　春名　勲
落葉掃く銀行員の背広にて　岡田　有旦
煤で書く俘虜の葉書や冬ざるる　同
手袋をはづさぬ握手手の淋し　土屋　良夫
年立ちて心しづかに墨を磨る　岡﨑　哲穂
ギリギリ迄自宅暮らしを木の葉髪　国光　六四三
極月のエスカレーター上下せり　磯　勢子
いつせいに熊野古道の柿熟るる　同
真鰯や一塊にして海碧し　松本　峰子
春雨の音は墨絵の余白より　斎藤　詳次
再会を楽しむやうに帰り花　猪田　初美
思ひ出に後悔多し虎落笛　同
時の日を曲がる連結バスに時差　鈴木　禮子
喪正月一人の家の一人の餉　瀬野　浩
作業着の冷たさばつと纏ひけり　宮崎　こうや
玉砂利へふはと出す杖初詣　同
ニュース読むＡＩの声そぞろ寒　佐藤　英子
眼を寄せて耀を待ちゐる寒鮃　富田　範保
括られし古書の高きにある余寒　古川　邑秋
虫すだく古墳の形に闇生まれ　同
母校より始業のチャイム大根蒔く　同
背を向けて背中で語る焚火かな　三ツ矢　龍美
灯なす熟柿古道の別れ道　山本　孝子
竹刀持つ手の強張りて初稽古　小谷　末子
風薫る店をまかせてグラウンドに　同
賢しらな口を利くなと木瓜の花　竹内　宏行

暁の名残顔なる今日の月　西尾　伊世子
冴ゆる夜の振子時計の音確か　蓮井　いく子
松手入れ通り掛りが指図して　同
思ひ出すやうに潜きてかいつぶり　同
身支度は氷の鏡雪女郎　同
母子して歌ふ畦径つばくらめ　東　里季
螺子少し弛めて生きむ酔芙蓉　同
枇杷熟れて地鶏つぶやく庭の隅　同
薔薇買つて帰れば何か言はれさう　藤堂　くにを
菖蒲湯の五右衛門風呂を頂きぬ　同
焚き添へてシテの出を待つ薪能　同
道行の舞台にも以て花吹雪　同
露草を踏みて余生の歩を慣らす　同
末座とはいへど月には遠からず　同
酪農を捨てて玉葱干す牛舎　同
遠目にも藤の紫なら解る　同
救急車赤灯回る夜寒かな　保理江　順子
日々笑みを絶やすまいぞと初鏡　同
人波の百万石や鰯雲　吉村　尚
初凪や地球の見ゆる岬灯台　松本　愛子
初山河息切らせ来る郵便夫　同
切干や母の匂ひの在りありと　同
雪轍従ふ如く靴の跡　三宅　美千子
初詣磴を数へる声と息　同
投函へ道一本の雪を掻く　宮崎　きくを
蟬の穴口径は約十五ミリ　本橋　無双
団栗の落ちてこちらに転がりぬ　同
気負はずに平凡に生き日向ぼこ　山口　登
寒雀一茶の句碑へ二羽三羽　同

皺が寄るほどに旨さの干大根　芦田　芳久
眉ひくに見詰むる鏡近松忌　近藤　昶子
梟の鳴く夜の鐘怖れけり　同
罠掛けて来しとふ手より栗貰ふ　同
雲沖へ流れ雨水の空ひらく　同
まだまだと団塊世代初暦　栄馬　啓子
巣つばめや駅の一日始まりぬ　貞許　泰治
飛火野に冬の鹿湧くホルンの音　同
寝たふりの上手な子猫貰ひけり　舘野　茂子
夫右利き妻左利き餅を搗く　富田　範保
雪晴の朝の金閣まのあたり　人見　正
母いつも姉さん被り大根煮る　堀　瞳子
真夜なれば恐しからむ破芭蕉　同
白菜の渦大皿にほぐしけり　同
榾を足すアイヌの星の物語　同
放水銃置かるる宮や寒旱　村上　みちこ
数へ日の雨を見詰むる厨かな　横田　恵
コスモスの風に登りの歩の軽し　同
鵠守る田は手を付けず春耕す　吉浦　増
吾子の歯の生え初む便り福寿草　同
混迷の世にこそ俳句翁の忌　同
お年玉どかんとコロナ五類かな　倉田　信司
いのししを追ひ詰めるらし犬の声　同
白鳥のぽとりと銀のひとしづく　同
矍鑠の声天を衝く国栖の歌　同
鉋丁のはた俎の音の春　同
風船の犬なり児の眸光りだす　同
香具山の水香ぐはしき青田風　同
揚花火紀州手毬の弾むごと　同
落し文郷里の子思ふ防人か　同

沖ゆくはギリシアの船か若葉摘む　牧田　満知子
一列に戦禍の国へ鳥帰る　同
小春日やいつ燃やさうか恋日記　同　升田　ヤス子
探梅や呂川辿りて律川へ　松本　信子
手招きをされて覗きぬ秋の川　同　三上　京子
明日へ向き小さく咲きぬこぼれ萩　道本　朗子
藻の花の息衝き絶えず小さき泡　同　森田　千重子
春待つや如雨露の水をやはらかく　森本　弘子
星流る地に産声のあがるとき　同　吉川　幸宏
百歳に伸び代ありと初みくじ　渡里　トモ枝
雪しんしん木彫の熊は歩くやも　同
本土へは十歩の橋よ鰯雲　同　朝日　道子
クリスマスツリーの光る寺の庫裡　同
立ち上がり立ち上がり試歩日脚伸ぶ　小笠原　聡子
鯛焼に口あり何か言ひたさう　桑原　智代美
初日受く健康寿命賜りて　斎藤　ふき子
叩かれて叩かれ西瓜買手待つ　清水　義博
風花や球蹴る子らの掛け声に　同　杉本　征之進
雪だねと窓見る夫と半世紀　常澤　俶子
丈ほどの凧と奮闘三歳児　同
雪霏霏と朴葉に味噌を焼くにほひ　藤岡　滿
手で示す釣果の寸や秋高し　同　古川　武人
電線の隙にオリオン柝響く
仏花にも並と上あり年の暮
探梅の海見霽かす墓地に出づ
狐火や窓の小さき外厠
明日香川に沿ひ行く小道梅探る
水音のしたる方へと梅探る
アイゼンに土の弾力雪間草
冬銀河タワーマンション灯の柱

おでん酒元は刑事の裏ばなし　古川　武人
酔へぬ夜も酔ふた振りする濁り酒　守作　けい子
凍滝の先の先まで凍てにけり　赤松　正夫
老ひとり蓑虫のごと漂へり　安藤　みつる
酔ひ醒めの朝の茶柱二日かな　飯田　敏康
大音声の父でありけり歌かるた　稲垣　いつを
神馬小屋の奥に人影年の暮　上原　悦子
舟止めの川眺めゐる雪達磨　植松　秀子
川風の常宿けふは祭宿　同
地のものの日替りメニュー海の家　同
鱗雲巨岩の上に胡座組み　梅本　比佐子
修復を終へし屋敷の新松子　同
海鼠海女潜りし海へ雪霏霏と　尾崎　恵美子
双龍に飛びつかれさう堂の冬　小野　雅子
をさな児の早や負けん気の歌がるた　同
あの鳰を双眼鏡の真ん中に　同
こころ残りあるがごとくに返り花　景山　典子
伸びるほど若竹に空遠くなる　同
福笑仕あげし顔を子が真似て　桑原　里美
道場へ一番乗りや寒四郎　同
法被跳ね紋の鯛跳ね秋祭　同
稲架を組む祖父の大きな力瘤　同
老犬に歩みを合はせ冬夕焼　同
寡黙なる祖父を手伝ひ菊根分　同
丸太つみ傾ぐダンプや日の盛　同
オイル臭纏ひ励みし夜学かな　近藤　周三
頃合ひと笑みのこぼるる温め酒　左近　静子
しやぼん玉一歩踏み出し吹く子かな　貞許　泰治
実梅もぐや上下左右と妻の声　同
少年の跳べば少女もげんげの田　同

夜学の子仕事着のまま教室へ　坂元軒二
口癖のよいしよよいしよと草むしり　同
一望に百を余せる牡蠣筏　杉本征之進
これからの最終章の日記買ふ　曽根新五郎
菰樽の名酒の文字の淑気かな　同
撮るだけで映らぬ男初写真　同
正月の息吹きかけし絵馬の文字　同
毛糸編む時間の束を積み重ね　田島もり
移住して百の牡丹を咲かせけり　同
ふらり来てこころ寄辺の余花に会ふ　田中利勝
風に散り凍ててまたたちる潮煙　同
二時間のフェリーで島へ旅始　手拝なをみ
いつからかイルカ並走冬の航　同
ポン菓子の大音響に冬日揺る　富田範保
雪に寝て雪より白し寒立馬　同
地震の地の割れし畑より大根抜く　中川キヌヨ
蟷螂の脚枯れてなほかまへたる　中川歓子
湯気立つる七草粥を仏らに　安藤道子
春隣入浴剤に長湯せり　同
石の上の椿そのまま竹箒　尾﨑晶子
眼裏は炎に埋まる震災忌　成光茂
御祓の巫女の鈴音春立ちぬ　西村節子
鉄橋の銘板し吹く雪解風　福盛孝明
眉ひくも忘るる一日冬ごもり　吉元美枝子
慈姑剥く夫しづかなり慈姑剥く　同
河豚鰭を干して客待つ縄暖簾　秦野淑恵
気づかざるものにしあはせ薺粥　松本英夫
寒鯉の湖西の水になりきりし　同
道草の子の又しやがむ犬ふぐり　村上絢子
うつらうつら旅の終りの暖房車　同

空港へ渡る眩しき春の海　森田教子
涸れ知らぬ流れに委ね紙を漉く　山尾カツヨ
蛤になれぬ雀と畑仕事　山本はじむ
河豚鍋やどうせ死ぬ迄暇つぶし　若林白扇
木枯に元気殺がるるランドセル　同
この星の半分は夜おでん鍋　同
立ち止まる子らの歓声煙茸　政元京治
滴りやここが源流鹿ケ谷　同
砂防ダム土に埋もり山眠る　同
お降りや足跡のなき田圃道　同
カレンダーみんな百円初弘法　同
和簞笥は思ひ出の箱冬温し　同
ほのぼのと病の自慢日向ぼこ　中村眞由子
草野球どんぐり降らすホームラン　同
取り込みし羽毛布団に子のダイブ　岩崎可代子
春時雨夫の右肩濡らしをり　同
日盛のバス停二つ通過せり　同
富士を日々仰ぎ菜の花蝶と化す　同
三歳のままの弟魂迎　同
抱きとめし子に仄かなる蜜柑の香　同
鷽替ふるフォークダンスをするやうに　同
塗り椀の加賀麩とりどり春を待つ　島田由加
戦争も地震も越えし春着着る　同
餅花や母でありつつ友であり　同
ああ言へばかう返さるる日向ぼこ　蔵澄絹枝
子を撫でるための母の手赤のまま　同
いつしかに大物顔や竈猫　同
コマーシャル待つ間の二分初化粧　田中美由紀
みはるかす蜆舟又蜆舟　吉浦増
しみじみとCT画像冴返る　同

落葉降る疏水の水の迅さかな　池田和子
水音は琵琶湖の疏水冬館　同
木守柿村にひとつの赤ポスト　同
しばらくは宝恵駕はやす声の中　冨安トシ子
草笛が吹けて少年反抗期　田中まさ恵
昼顔や基地のフェンスに絡み咲く　同
伸びに伸ぶ桶に添ひたる海鼠かな　坂本ふき
薄氷の指すり抜ける秘めし色　同
勘当の子に酌まれぬる雪解宿　谷本緑
一人寝の蒲団は重き花柄よ　上田圭子
初夢のさはりを言ふにとどめたり　一條文子
柿焼けば子規の知らざる甘さあり　同
手相見の手が着ぶくれの手を握る　池田華甲
しなやかに股を潜らせ手毬つく　池田美砂子
脂身の薄きを説けり猪猟師　同
蜜柑むく昭和の歌を聴きながら　上西美枝子
開運の飴をバッグに旅始　同
息荒し雪原駆くるばんえい馬　大内ひろみ
屋根に屋根重なり雪の漁港かな　大島幸男
下校児に手を休めたる雪下し　同
少年の押す自転車の大根かな　同
いつ上るともなき郷の遠花火　同
冬温しベンチに昼餉する人も　同
日輪のおぼろや与謝の細雪　同
吾よりも吾を知る妻根深汁　小野薫
大仏の膝下に寒の募金箱　角野京子
大寒の香炉を担ぐ三鬼かな　同
線香の火種の逃ぐる寒さかな　同
パン粉捏ね身を扁たうし春立ちぬ　亀澤邦男
手を握るだけの看取りや夜の秋　古賀勇理央

芋の露揺らぎゆらぎてなほ落ちず　古賀勇理央
研ぎしかに嘴の鋭き荒鵜かな　坂口恵子
鵠来て水鳥の湖整ひぬ　同
川底を覗く子等の眼日脚伸ぶ　下口啓子
障子貼る妻の指図を背ナに受け　須賀遊子
何事も手際よき母針供養　田中清司
木々の間の夕日明りや鳥交る　同
八方によろこび広げクロッカス　同
猫の耳ぴくりぴくぴく日向ぼこ　土居直子
夕星を露はに落葉尽くしけり　久松雅彦
手ちぎりの餅花小さき指のあと　同
秋深むこの物忘れ如何せん　廣田絹子
初刷の朝刊夫に供へけり　藤田駒代
おづおづと赤子抱く父桃の花　同
金婚の卓に零れて黒葡萄　同
暮易しバスは灯して客を待つ　藤田啓子
くわりん落つ地面拳で打つごとく　同
己には落さぬやうに栗落す　前田拓
青空を泳ぐかたちに柳葉魚干す　同
寒垢離の終へたる湯気の総身かな　同
寒鯉の動かぬやうに動きけり　松村正之
御子のごと赤子受け取る初湯かな　村田和司
雪見舞ショベルと命綱担ぎ　山内節子
煮凝や庇をよぎる星の数　同
風に乗るアザーンの声秋澄めり　山﨑隆代
葉隠れに榊の花の匂ひけり　同
廃線の決まる故郷寒昴　山近由美子
卒業す君が代歌ふこともなく　同
横笛を吹くは女人よ里神楽　同
冬麗や考の揮毫の橋名板　山本隆之

宿坊に碧眼の僧青しぐれ　桃原晴美
会釈して月のベンチに隣り合ふ　荒木信夫
うららかや唄ふが如き母の愚痴　同
水切りの波紋の光る二月かな　池田桂子
冬草の軽き重さを運びけり　井澤佳代子
鳴き龍へ拍手一つ堂の冴ゆ　宇民雅子
再開のカフェの窓辺のシクラメン　大島文子
巣燕を見上ぐ赤白黄の帽子　大西きん一
千枚漬終へれば風の鳴るばかり　岡島千秋
徴兵のなき国にゐて冷奴　岡田邦男
一人づつ去りてひとりの十三夜　同
さん付けで我を呼ぶ母秋桜　同
冬ざれや徐徐に壊れてゆく生家　同
十二月八日に届く回覧板　同
蓬餅買ふ楽しみの寺巡り　岡田満喜子
湾のクレーンすべて止まるも淑気かな　同
阪神忌備蓄の水の朝のティー　同
漁火に傾れて銀河いよよ濃し　小澤巌
神集ふ杜に音なく狐雨　同
神神の去にて出雲の山眠る　同
待春の堀にきらめくささら波　角野京子
着膨れて天守に読める太閤記　同
尼寺に焙じ茶香る寒土用　同
雨粒の光る楮や春近し　同
大声で十日戎の銅鑼叩く　木森啓至
着ぶくれて源氏絵巻を見てをりぬ　窪田粧子
侘助や鳥語に心あそばせて　同
金婚の夫は年下冬あたたか　蔵本芙美子
枝宮の一つ一つも初参　同
須磨の冬一弦琴の弦の張り　坂根宏子

砂浜のダッシュ百回寒稽古　坂元軒二
地に還る他なし蓮の枯れ伏して　同
生きてゐることの喜び根深汁　同
かかへられ来し着ぶくれの大僧正　坂口夫佐子
擦り剥きし膝小僧抱き寒土用　佐々木たまみ
正月の雪積もりゆく地震の家　同
立ち上がりまた駆くる子よ風車　貞許泰治
ドッジボールの行き来マフラー翻る　同
冬帽子ベールに替へて朝の弥撒　佐藤三千子
ふつくらと母の手のごと春ショール　同
おん祭舞処も観るも芝の上　同
旧家たりここだ千両庭明り　里西美佐子
天井絵の龍も和しけり福は内　須賀遊子
乗り遅れ佇む駅の余寒かな　鈴木憲一
百歳体操終へたる婆の日向ぼこ　高橋翠
発掘の第五次六次大枯野　同
柚子風呂に愛宕越え来し靴並ぶ　谷添睦子
叡電に揺られゐる間を日向ぼこ　同
北窓を開いて脱皮するわたし　中島三郎
伊勢講の衆に振る舞ふ年酒かな　中谷恵美子
夕しぐれ言葉足らずに別れけり　中浴智美
足もとに鳩の寄り来る小春かな　長岡静子
もてなさる海山のもの囲炉裏端　永田康子
索道のワイヤたるませ蜜柑の荷　同
大寒や雨の降らねば畑へ出て　西原薫
読初のなぞる指先点字本　西村友規
日向ぼこ指定席みな持つてをり　橋本正幸
里山は大き鳥籠時鳥　長谷川紀美子
鳶舞うて淡海の凍ゆるびけり　同
奉納の藁の大蛇や豊の秋　同

避難所に膝かかへつつ鰤起し　佐藤舟若
他愛なき話で弾む女正月　塩見正子
紅させばまだ現役と初鏡　同
北窓を塞ぐ簞笥の位置変へて　神藤寛子
冬紅葉濃き山寺に水の音　同
石垣の隙間隙間の花菫　世古まさじ
船旅の少し寝不足涅槃像　同
高層の裏手に祠午まつり　関口烏石
かまへんは承諾のこと春近し　瀬崎こまち
寒凪や白雲映す潮溜り　高階和音
十二月八日海鳴り聞えをり　田中久幸
諦めてをりし春月出てゐたり　同
神酒供へ撒くは校長どんど焼　同
亡き父の書を軸にして冬座敷　中島正則
父母なくて兄弟遠し松の内　同
独り居の寒の雑巾しぼりけり　長山敦彦
夏掛を蹴り落としたり父も子も　同
エンドロールのごとき雪見るガラス窓　二井桜子
日向ぼこ昨日と同じ話かな　西尾敬一
翼あるものも歩けり大干潟　同
満目の青田を風と帰りけり　同
海女小屋を縛り上げたる野分かな　同
足の爪切つて勤労感謝の日　同
寒の鯉水が重しと沈みをり　同
莫蓙巻へ白刃一閃堂涼し　野畑明子
どんぐりのみな名を得たる展示箱　同
風に日に素直に痩せて干大根　同
にげられぬ裸木風の中に立つ　初井まり子
父と夫連れ立ちて行く茸山　橋本貴美代
結ひ髪の美女は少年初暦　菱野としみ

よく動くところ瑠璃色寒の鳩　日野久子
龍を彫る鑿二百本冴返る　同
落ちてより見詰め合ひたる紅椿　平万紀子
薬莢を以て呼び戻す猟の犬　平田冬か
寒天の風より軽く干し上がる　同
雪だるま僕帰るまでとけないで　藤川喜子
半分は余白の詩集シクラメン　同
警報機の音にも止まぬ猫の恋　村上智美
毛糸編む妻はまたもや生返事　同
鶯替や替へたき巫女は渦の端　村上直子
湯気纏ふ手の神がかり寒造　同
遠き日のやうに母との日向ぼこ　山本輝代
香の物添へある宮の七日粥　山本礼以子
弓道部結はれし黒髪にも淑気　吉田あゆみ
受験子へいつもの卵焼き弁当　同
トーストの焦げ目の濃くて蝉時雨　朝田敏子
風吹けばあなたのことを雪の夜も　芦田恵子
ライバルは百三歳や日向ぼこ　池田廣子
三行で足りる暮らしや日記買ふ　板倉眞知子
例会の窓に沖ある四日かな　市川薹子
人の世に国境のあり大地凍つ　伊福悠紀
悴みし影を従へ帰り来し　同
瀬戸内は曇りのち晴遍路笠　同
ででむしと会話中なり子らふたり　同
笛を吹く教師は不動寒風下　稲垣美知子
頂上は雲の中なるお花畑　井上恵美子
鬼百合の蕊むき出しに反り返る　同
慈善鍋人の温もり滾らせて　同
見た目には柔らかさうな冬木の芽　同
帰路もこの道にしませう冬菫　同

芽やなぎやこつぽり鳴らし巽橋　宮川秀穂
幕の内弁当膝に二の替　同
湯熨斗てふ言葉なつかし毛糸編む　宮本啓子
円光は吾をも照らす涅槃変　村手圭子
神在の瑞垣の隙のぞき見る　桃井克夫
春蘭の鉢も並べて骨董屋　森山久代
夫婦とは斯くの如きかちやんちやんこ　同
みづうみのこよなく晴るるいさざ舟　同
数へ日の駅の床屋の混み合へり　師岡洋子
日脚伸ぶ艇庫の壁の水明り　同
子は化石われは蕨を探しをり　同
輪飾や小さけれどもわが書斎　同
寺六つ城下の名残除夜の鐘　八嶋昭男
栗ごはんみんなゆつくり噛んでゐる　同
もう一度夜干の梅の空仰ぐ　同
戸締りの校舎巡回底冷す　矢吹あさゑ
囀や鳥にも好きな木のありて　矢野洋子
天心にふはりと白き朴の花　山﨑淑加
米を研ぐ指に来てゐる春隣　渡邉眞知子
松原へサックス抱へ初稽古　同
父の日や似顔絵貰ふ参観日　赤利令
鈴生りの栴檀の実の鈴の音　同
縄文の足跡小さし穂絮飛ぶ　有村真由美
寒稽古くつきり古稀の力こぶ　同
顳顬を押へ大盛かき氷　猪飼和代
門からの見映えを問うて剪定す　同
最大の円を描きて独楽止まる　伊藤孝子
城跡の石一万個秋高し　稲田いづみ
晴れ晴れとたふれてをりぬ秋桜　乾祐子
冬眠の蛙膝行鍬の先　植木啓次

巣燕やかろやかに舞ふ淡路木偶　植田桂子
部屋ごとに吊るすポプリや百千鳥　同
花型の干菓子いろいろ仏生会　同
飛ぶやうにきたる少女やしやぼん玉　同
春しぐれ竹一幹の抜きん出て　同
縮れゆく護符を拝めりどんど焼　梅枝あゆみ
味見をへ去年となりたる厨かな　江濱百合子
鳳輦の過ぎたる真闇蚯蚓鳴く　大山文子
白鳥の着水夕日急かしたる　同
四本の手の皺くらぶ日向ぼこ　尾﨑妙子
白檀の香の中にゐて去年今年　小野勝弘
寒牡丹大和の冷えを宿しをり　小元洋子
春眠の夢に出るひと皆若き　河田智代
骨壺の白より白き沙羅の花　同
ひとり居に野遊び誘ふ着信音　吉瀬秀子
夫の席写真飾りて年迎ふ　木谷百合子
ＰａｙＰａｙの使へる神籤初詣　木村あき子
朝のドア飛び出してゆく守宮かな　同
耳向けて忘れ上手の日向ぼこ　香山直子
小枝の手つないでゐたる雪だるま　同
雪こんこん校庭を声はねまはる　坂井恭子
松の芯小さき喧嘩を五十年　佐方明遊
鳴き合ひて頭上五千の秋燕　佐藤やすこ
ミニスカートロングスカート青き踏む　清水寿恵子
百年を生きて万歳なずな粥　嶋田嘉鶴子
赤青黄リボン違ひの子猫かな　下田あつ子
唐辛子みんな青空目指したる　同
煤逃げの黙つて包を差し出せり　同
ポインセチアの鉢を託して友逝けり　同
石蹴りの姉妹へ村の小春かな　白数宏子

鳥渡る城より高きビルの増え　浅田おさむ
折り鶴に息吹き入れて春を待つ　池田光子
老年にもある恋心冬苺　池田緑人
寒の水ペットボトルに備へけり　伊藤由利
笑顔佳き巫女に福笹たまはりぬ　伊佐紀子
猿回し客集るを待つてをり　同
初蝶のほろほろ息をこぼしけり　岩水節子
年の瀬や運河のやうな人の波　同
新藁を子を抱くごとく抱く農婦　同
街角の角が鳴り出すクリスマス　同
十八のままの伯父なり沖縄忌　上江洌一石
足掻き立ち走り去る鹿角伐会　内田あさ子
道尽きてそこが行場や滝凍てて　同
公園の遊具塗り立て春近し　同
幸せのひとかたまりや毛糸玉　宇野晴美
団塊の世代生き抜き大根干す　同
大地いま濡らす寒九の雨匂ふ　角山隆英
いささかの日もはなさじと冬紅葉　金津やよい
大綿を掴み掌何も無し　同
底冷の空也の痩躯草鞋履き　同
サーファーやおのが波待ちたゆたへり　古賀理之
花辛夷幼の声の弾け飛ぶ　串田洋子
災禍の冬支援の根付く秋津島　同
白寿の師壁に大きな初暦　倉橋みどり
大釜を沸らせ若布刈舟を待つ　古賀勇理央
山籟のをさまらぬ夜の濁り酒　小都妙子
母に似る後ろ姿の春ショール　同
介護より帰る車窓の揚花火　同
甲板に離任の教師鰆東風　同
頼りきし夫に頼られ梅日和　小林和子

夢殿を訪へば時雨るる雷の鳴る　小林和子
百選の夕日に染まる水仙花　小林真千子
起重機の伸び切る十二月八日　近藤伸子
子より先に犬の跳び越え春の川　同
初鍛冶の桶に榊を浸しをり　阪本道子
古里の変はらぬ家並日野菜干す　酒井多加子
義金箱置く待春のコンサート　鈴木玲子
守り来し山家手放し春惜しむ　同
手加減の玉にはじまる雪合戦　田中美幸
冬銀河神話の里を覆ひけり　同
まばたきを返すも言葉百合の花　同
庖丁の握り手清め冷奴　谷美津子
歩きかた忘れさうなり冬籠　種村真小児
春を待つ交番前のプランター　徳永真弓
校正に倦みベランダへ月今宵　同
落武者の如きランナー寒の雨　中島走吟
亡き父の墨書の日誌虎落笛　中筋のぶ子
篠山町表通りに猪吊るす　西上禎子
明日予定なき柚子風呂を長湯して　同
忙しげに木伝ふ小鳥春近し　服部登紀子
偕老の夫よりもらふお年玉　同
春近し苔にふわりと鳥の羽根　福頼聡子
遠山はしぐれ日矢射す姫路城　福田えいじ
春の雪紙鍵盤に弾む指　真尾公子
朝日さす地蔵の膝へ柏餅　増田勝子
花冷や捨つるに惜しき母の服　松井春雄
番鴨瀬音に乗りて下りけり　緑川啓子
葛湯吹く文一通を書きあぐね　同
懐しき丸い筆跡年賀状　三原寿典
冬うらら比叡の上に觔斗雲　同

休校と呼ぶ廃校よ鳥渡る　松浦良直
日の差せど寒風頬を切る如し　同
寒見舞大福さげて長子来る　松村貴美子
冬ゆやけ犬に合はせて六千歩　三澤正弘
冬菫すすり泣く子とただ歩く　宮川育子
歳晩や白湯一服に今日を閉づ　宮本紀久代
初芝居帰りの髪に紙の雪　安里道子
羽子板や姫の片袖ごぼれ出て　同
枯木道音符並びに寄生の毬　山崎圭子
エープリルフールわたくしとしたことが　山中谷勝子
碧天の奥に碧天寒桜　渡辺倫子
冬怒濤くだけてなほも立ち上がる　同
巌となり壁となりては冬怒濤　同
保育所の前に菜の花潮の音　同
電車より電車を指す児あたたかし　近藤伸子
かはたれの星あはあはと垂氷かな　百田広香
お正月俳縁といふ宝物　山内豊
朽ち舟にあそぶ小魚水の秋　西本睦子

関西俳句大会入賞句並びに作者一覧表

○印は朝日新聞社賞、無印は関西俳句大会賞

第四十四回（平成二十一年）

○
寒肥を混ぜたる土の色となる　柳生清秀
若水をもれなく百の牛に汲む　佐藤綺峰
雪合戦頭数では負けてゐず　井上あや子
遠足の子らにとどかぬ象の鼻　橋本正幸
白山に雪来て鍬を仕舞ひけり　伊藤秀雄

第四十五回（平成二十二年）

○
膝ひとつ詰めて始まる十夜かな　横山茂子
涅槃図に風の嘆きの加はりぬ　小畑晴子
濯ぎては水叩きては楮晒す　高瀬博子
臘梅の香のかたまりの中を過ぐ　請関くにとし
一斉に尻向けて来る田植かな　眞砂卓三
海鼠みな受難のかたちしてをりぬ　山田絵里
焼いもの車第九を流しをり　三津木俊幸

第四十六回（平成二十三年）

○
蜃気楼船が通りて消えにけり　滝川ふみ子
切能に奈良の底冷え只ならず　池田雪彦
雲入りをおおと囃して初蹴鞠　瀬川一雄
牛売りし小屋の闇にも豆を打つ　佐藤綺峰
夜桜に漆黒の空ありにけり　大星たかし
次郎長の出遅れにけり村芝居　大河内芳子
降りしきる雪に朝市荷をほどく　左近静子
厩出しに来てゐる女獣医かな　小畑晴子
熊楠を知る子もゐたり夏期講座　長田久子
分校の五人に巣箱ひとつづつ　浅井陽子

第四十七回（平成二十四年）

○
悪戯をしさうな仏手柑の指　有岡巧
まつ白な毛糸を買ひて母となる　若村愛子
いたちの尾穴いつぱいに入りゆく　岩口誠一
一枚を脱いで猪鍋食べつくす　芳田トモ子
まんさくや渓ひとつ越え隣家まで　大石久美
夕暮のもの言ひたげな雪だるま　井上あや子
一月や弓のかたちの弓袋　中西宏
金閣の光の中の松手入　井田あや
新藁の小屋の外まで匂ひけり　浦井善史

第四十八回（平成二十五年）

○
蜜豆や母の着物のよき匂ひ　平石和美
海を向く位置が上座や浜焚火　尾崎亥之生
雨あとの闇美しき十夜かな　すずき春雪
鴉にも餅撒く吉野山始　上村佳与
行く秋の客あれば発つ渡し舟　碇天牛
癒えてけふ厨に春の灯をともす　小鉢愛子
あなどつてゐてずぶ濡れや花の雨　小松丈夫

第四十九回（平成二十六年）

○
一職に徹して鏞祭りけり　中村一志
サングラス互に外す別れかな　廣田波多香
狸来る知らぬふりしてやりにけり　宇田瑞代
つばめ来る百万遍の交叉点　河合紀美子
箱庭に杜甫と李白を立たせけり　長谷川フジ子
波の花間垣を越えて屋根に舞ふ　藤田紀美子
白魚のはじける命掬ひけり　小畑晴子
やさしさは採点されず大試験　古川和子
山焼の百の火の手が巌押す　加計姉子

第五十回（平成二十七年）

○
金扇の裏表見せ鉾すすむ　西浦昭美
景品は子牛一頭島祭　村田浩
夜神楽の神となりたる父畏れ　若村愛子
大杉の空が鳴るなり鬼やらひ　大山文子
千の灯の一つは吾子や阪神忌　品川厚子
潮回り佳きを祝詞に磯開　浅井陽子
三百の牛に新藁届きけり　近藤昶子
蜆舟出揃ひ靄の動き出す　長谷川紀美子
嬉しさの大きさとなる雪だるま　吉田喬子
早蕨の一本づつの音を摘む　古賀勇理央

第五十一回（平成二十八年）

○
抱き取りし子になまはげの藁匂ふ　小畑晴子
龍天に登り赤子に蹴る力　前田攝子
灯台に入り遠足が螺旋なす　林波子
うかうかと生きて木の実に打たれけり　小野青のはら
神楽笛神代の闇を引き寄せて　中平万紀子
手毬つく今もどこかで神隠し　七種萩介
秋深む一つの事が終るたび　中川計

【お知らせ】

今回の予選は浅井洋子・朝妻力・柴田多鶴子・田中春生・三村純也・森田純一郎の六名によって行われました。

また選考会は田中春生・名村早智子・森田純一郎の三人によって行われました。

応募投句について

① 専用投句用紙を使用して頂きます。専用投句用紙は関西支部所属の俳人協会員及び前年度に応募投句された方に大会開催ご案内と共に送付いたします。コピーして頂くことによって何組でも投句できます。また、俳人協会ホームページよりダウンロードできます。

② 文字は楷書で読みやすく書いてください。

③ 前書・ふりがなはつけないでください。

④ 俳人協会会員以外の方も応募して頂けます。

応募句は未発表のものとします。

また類句・類想句・重複投句については入選を取り消すことがあります。

発行所

〒550-0013 大阪市西区新町一丁目六―二二 新町新興産ビル三階

公益社団法人 **俳人協会関西支部 関西事務所**

TEL（〇六）六五四一―〇四三二

FAX（〇六）六五四一―〇八四一

吟行案内シリーズ

①新大和吟行案内
②新京都吟行案内
③武蔵野吟行案内
④新大阪吟行案内
★⑤新東京吟行案内
⑥秩父武蔵吟行案内
⑧横浜川崎吟行案内
★⑩新兵庫吟行案内
⑪湘南鎌倉吟行案内
⑫芭蕉吟行案内
⑬房総吟行案内
⑭越佐吟行案内
⑮茨城吟行案内
⑯小田急沿線吟行案内
⑰栃木吟行案内
⑱若丹吟行案内
⑲南九州吟行案内
⑳加賀能登吟行案内
㉑伊豆吟行案内
㉒近江吟行案内
㉓三重吟行案内
㉔愛知吟行案内
㉕紀の国吟行案内
㉖岩手吟行案内
㉗広島吟行案内
㉘岐阜吟行案内
㉙熊本吟行案内
㉚宮城吟行案内
★㉛大分吟行案内
★㉜富士山吟行案内
★㉝北海道吟行案内
★㉞鳥取吟行案内

頒価 一五〇〇円

★印は一八〇〇円（カラー版）

送料 いずれも三〇〇円

申込先 俳人協会 吟行案内係

〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10

振替 00160-2-273

電話 03(3367)6621

FAX 03(3367)6656